■論文■

JATIS2013-14 に基づく大学間国際交流の意義と課題

市川　顕
山本竜大
中村　圭

1：はじめに

本稿は 2014 年 2 月 11 日から 21 日にかけて、トルコ・コジャエリ大学と関西学院大学（以下本学）の学生各 10 名が参加して本学にて開催されたトルコ交流セミナー（Japan and Turkey Inter-Cultural Seminar：以下 JATIS）について、その意義と課題を明確化させることを第一の目的とする。そして、このプログラムにおいて、準備期間中およびセミナー最終日に日本人参加学生からとったアンケートの結果をもとに、2013 年度の JATIS（以下 JATIS2013-14）が本学学生にとってどのような影響を与えたのか、とくに国際化の観点から分析することを、第二の目的とする。

日本でも、大学の「国際化」「グローバル化」が叫ばれて久しい。そして、それらを目的として多くの大学で、国際交流プログラムが用意されている。しかし、それらが現実にどのような役割や意義を学生に与えているかについては、これまでの長期にわたる「経験則」に依存する部分が大きかったのではなかろうか。本稿では第 3 節で JATIS2013-14 の実施過程の精査を通じてその意義と課題を定性的に分析するとともに、第 4 節でアンケート結果に基づく参加学生の「国際化」についての定量的分析をおこない、今後の JATIS さらには同様のプログラムの計画・運営に反映させることを最終的な目的とする。

2：本学における海外留学プログラムと JATIS の位置づけ

本節では、本学における海外留学プログラムと、そこでの JATIS の位置づけについて確認する。

2-1：本学における「世界市民」の育成

本学では、平成 23 年度文部科学省大学の世界展開力強化事業として採択された「日加大学協働・世界市民リーダーズ育成プログラム」が実施されている。さらに平成 24 年度文部科学省国際化拠点整備事業費補助金「グローバル人材育成推進事業（全学推進型）」において「実践型“世界市民”育成プログラム」構想が採択されている。これらのプログラムのもとで、本学の世界に貢献する力を持つ「世界市民」と、文部科学省のいうところの、日本の国際力を高め他国との絆を強化する「グローバル人材」、その双方の特徴をもつ学生の育成が課題となっている。

さて、「Mastery for Service（奉仕のための練達）」の実践を掲げる本学の「世界市民」育成の試みの中核は、国際連携機構国際教育・協力センター（以下 CIEC: Center for International Education and Cooperation）が担っている。CIEC は、各種海外派遣プログラムの開発、留学・国際プログラムに関する情報提供、留学前・中のサポート、キャンパスの国際化を主要な任務とする。なかでも、海外留学プログラムの提供は本学学生の「世界市民」化に大きく貢献する職責であり、そこでは、国連セミナー、関学国際ボランティア、海外フィールドワーク、各種語学研修、海外インターンシップ、

中期留学、交換留学、認定留学、ダブルディグリー留学、ランバス留学など、多彩な海外留学プログラムを設定している。そして、この海外留学プログラムのひとつに、JATIS がある。

2-2：JATIS 概要

本学では、2010 年に外務省が実施した『トルコにおける日本年』を記念して、トルコ・コジャエリ大学との交流プログラムを開始した。コジャエリ大学はトルコ最大の都市イスタンブルから車で約 1 時間半の場所に位置し、1999 年に本学同様、大震災で被災した経験を持つ公立大学である。1999 年の大震災を契機として日本の NPO や芸術家と交流があったコジャエリ大学芸術学部が本学の交流相手となった。一方、本学は全学部の学生を対象に交流を始めた。2010 年 3 月にトルコで初めて JATIS を実施し、同年 9 月に本学にてコジャエリ大学学生・教員の受入を行った。この際、コジャエリ大学芸術学部長が来日し、プログラムの意義や有用性、普遍性の観点から芸術学部単独のプログラムではなく、全学の学生を対象とすることを確認した。その後、JATIS は毎年一回、日本とトルコで交互に開催されている [1)]。2010 年の交流開始から今回までにトルコで 2 回、日本で 2 回実施した [2)]。

JATIS ではこれまで、両国の文化や歴史、平和さらには震災等をテーマに両大学の参加学生が発表や議論を行ったり、視察見学や、演劇・演奏などを行ったりしてきた。JATIS 最大の特徴は、これらの企画を学生達が中心となって運営することである。ホスト国の学生達が主体的にプログラムを運営する中で、両国の学生が言葉や文化の壁を越えて、お互いを理解し、世界市民として羽ばたく契機となることを目標とする。とはいえ JATIS は、本学が提供する国際プログラムの中では、「第一段階」であり、ある意味で「Open Eyes（世界市民としての次のステップを目指すために、まずは「目を開く」こと)」のためのプログラムとして位置づけられていることを指摘すべきであろう。そのため、JATIS は応募にあたって要求される英語のスコアが他の海外留学プログラムよりも相対的に低く、大学 1 年生から 4 年生まで、比較的容易に応募可能なプログラムとなっている。

3 ：JATIS2013-14 の実施過程：その意義と課題

本節では、JATIS2013-14 における実際の運営過程を 6 つの段階に分け、現実に実施したプログラムの内容を確認する。そして、それを通じて発見された当プログラムの意義と課題について提示する。

3-1：教職員による事前打ち合わせ

【実施過程】

本稿筆頭著者の市川が JATIS2013-14 担当教員となることが決定したのは、開催の約 1 年前、2013 年 1 月 23 日に遡る。同日の CIEC 長、CIEC 次長および本稿共著者の中村（JATIS 担当事務職員）との会議で、① JATIS を第一歩として他の留学プログラムへとステップアップさせることを目的としているため、応募に際しての英語要件が低く設定されていること、②コジャエリ大学と本学は、震災を主とした共通点をもつことから、それらを基盤として互いの文化を伝え合う目的があること、そして③当プログラムは本学において非常に人気があり相当数の応募が予想されること、が

1)　本学グローバルスタディーズ科目に位置するトルコ交流セミナーは、2012 年度より科目化されており日本開催が「トルコ交流セミナーB」、トルコ開催が「トルコ交流セミナーA」となっている。科目化される前は「日本・トルコ学生交流プログラム」という名称で実施していた。

2)　独立行政法人日本学生支援機構は、グローバル社会において活躍できる人材の育成、日本の高等教育機関の国際化・国際競争力強化の観点から学生派遣および受入れプログラムを募集し、奨学金支援を行っている。トルコ交流セミナーは 2011 年度および 2012 年度に留学生交流支援制度「ショートステイ・ショートビジット (SS・SV)」に採択され、日本開催時（2011 年度）にはトルコの学生に 8 万円、トルコ開催時（2012 年度）には本学の学生に 8 万円の奨学金が支給された。2013 年度は不採択であったが、2014 年度（トルコ開催）は SS・SV の流れを汲む「海外留学支援制度（短期派遣・短期受入れ）」に採択されており、成績基準・会計基準を満たす本学学生最大 12 名に 8 万円の奨学金が支給される予定である。

確認された。

次の会合は 2013 年 7 月 19 日に開催され、市川・中村と足立（JATIS 担当事務職員）の 3 名が出席した。ここでは、前回の会議後、トルコ側の資金問題[3]にともない、日本側からトルコ側への金銭的支援を行う必要が発生したことから、通常の 14 日開催×各大学 15 名の規模ではなく、10 日開催×各大学 10 名の規模で JATIS2013-14 が開催されることとなった[4]。また、当プログラムは語学研修というよりは、学生の主体性や学術性により重点を置くことも確認した。

【意義と課題】

事前打ち合わせの過程では、最初に CIEC 長および CIEC 次長といった重責を担う教職員との会議が設定された。これにより大学全体としての JATIS の位置づけが、担当教職員に対して明確に伝わった。これが、第一の意義として挙げられる。それにより、2013 年 5 月に判明したトルコ側の資金不足といった不測の事態に対して、担当教職員が状況を収束させることが容易となった。また、CIEC の JATIS 担当職員が中村で一本化されていたことも、情報の流れが滞ることがなかった大きな要因である。

他方で、この種の国際交流プログラムでは今回の資金不足の件のように、突発的なアクシデントが発生することがある。この種の課題を常に念頭に入れて、プログラムの準備段階を進めていく必要がある。また、この種のアクシデント対応には相応の労力がかかるので、学期中の教員ではなかなか難しい。相手大学の事情に精通した事務職員の尽力が、問題解決の十分条件となる。

3-2：参加学生の選考過程

【実施過程】

JATIS2013-14 の書類応募は 2013 年 10 月 11 日で締切となった。これに先立つ 10 月 2 日に教職員会議が開催され、市川・中村・足立の 3 名が出席した。ここでは、主に参加学生の選考過程について、さらには選考後、学生が主体となってプログラムを作成する際に、どのような企画であれば対応可能か、について話し合われた。

JATIS2013-14 には 30 名の応募があった。事務職員は 10 月 11 日に、参加願の PDF ファイルと、JATIS 参加願に基づき作成したエクセル・ファイル（氏名・学部/研究科・学科・学年・学籍番号・英語試験の点数・過去に参加した国際交流プログラム名・書類選考通過の場合の面談希望時間（AM/PM）が記載）を市川に渡した。市川は、これらの書類をもとに書類審査で 19 名に絞り込み、結果を 10 月 12 日に事務職員に伝えた。事務職員はこれをもとに 10 月 14 日に面接日程を組み、10 月 19 日に面接選考が実施された。

書類選考では、英語の点数の良い学生を上から 10 名選抜し、残りの 9 名は主に参加願中にある「参加理由：このプログラムで学びたいこと」の内容と、これも参加願中にある「クラブ・サークル・委員会などの学校での活動の経験・その他の社会活動」の内容によって英語の点数には関係なく選抜した。この時点で社会学部 2 名、文学部 4 名、法学部 3 名、商学部 1 名、経済学部 3 名、教育学部 1 名、国際学部 2 名、総合政策学部 3 名が候補者として残った。

10 月 19 日の面接選考は、1 対 1 の面接方式を採用した。グループ方式を採用しなかったのは、候補者一人ひとりの個性を会話の中で見極めたい、という思いからであった。したがって、圧迫的な面接手法は取らず、和やかな雰囲気を作り、できるだけ多くの話を候補者から引き出そうと努めた。

全員に聞いた共通の質問事項は、以下の 7 問である。① JATIS の志望動機、② JATIS で企画したいテーマ、③ JATIS に対してあなたがどのような点で貢献できるか、④あなたの得意なこと、⑤あなたが大学で勉強していること、⑥ 11 月から始まる準備会と準備合宿にすべて参加できるか、⑦

3) 通常 JATIS では、訪問する側（ゲスト）が開催国の国際空港までの渡航費用を負担し、迎える側（ホスト）の大学が宿泊費や国内交通費、食費といった国内での経費をまかなうことになっている。

4) 学生アンケートでは、「10 日間は短すぎ、10 人も少なすぎると感じる（K)」「もう少し日数を延ばして欲しかった（E)」などがあり、10 日間開催は今回だけの措置として、今後は 14 日間開催に戻す必要があろう。

今回の応募は、来年度の JATIS（トルコ開催）への参加が前提か。ここでは、きちんと自分の意見を自分の言葉で伝えられるかどうか、JATIS に賭ける思いの強さ、準備過程への全面参加の可否、これからのキャリアアップに JATIS が資するか、現在学んでいることと JATIS との関連性の強さ、などを基準として 10 名を選抜した。その 10 名は以下のとおりである（性別・学部・学年）。A（女・文・2）、B（女・商・2）、C（女・国・1）、D（女・総・2）、E（女・文・3）、F（女・社・2）、G（男・法・2）、H（女・経・2）、I（男・法・1）、J（女・総・2）。

このうち、D と F は前年度 JATIS にてトルコを訪問した経験をもち、A・C・D・H は TOEFL-ITP500 超、B は TOEIC で 830 のスコアを持つ学生である。また H は 2014 年秋学期からのコジャエリ大学短期留学が決定していた。G・I の男子 2 名は顕著な英語のスコアや海外経験はないものの、真摯にプログラムに参加しようとする姿勢を評価した。ところが 10 月 25 日になって、過去の JATIS 経験者である F が他の留学プログラムへの応募を理由に参加辞退となった。そこで、10 月 28 日に K（女・教・3）を繰り上げ選抜し、最終的に 10 名の参加者が決定した。

【意義と課題】

参加学生の選抜は、JATIS のような学生主体のプログラムにおいて一番重要である。今回は、書類選考で英語のスコアという客観データと「参加理由」という主観表現の双方を使って選抜し、面接選考では総合的にバランスに配慮した選考を行うことができた[5)]。

バランスに配慮した、というのは、例えば以下のようなことである。第一に、男女比である。そもそも最初の 30 名の応募段階で男：女＝ 7：23 であり、参加願の記入の仕方の緻密さを斟酌すると、単一の評価基準で選抜すれば、全員女子になるのではないか、との危惧さえあった。結果としては、面接選考で JATIS への思いを強く表現することのできた男子 2 名を選抜することができたが、男：女＝ 2：8 という比率となった。第二に、所属学部である。やはり全学のプログラムであるという性質上、各学部に JATIS 経験者がいることが望ましい。今回は、人福・理工・社・神を除く学部の学生が結果として参加することができた。第三に、英語の得手・不得手である。もちろん英語のできる学生が参加する方が望ましいが、他方で JATIS の Open Eyes プログラムとしての性質上、現状英語は不十分であるが、世界市民として羽ばたこうとする強い意欲をもつ学生を選抜する必要があった。E・G・I・J がこれにあたる。そして最後に、過去の JATIS を経験した学生の選抜である。今回は D・F を選抜できたが、F が辞退することになったのは残念であった。

このように学生選抜には工夫をしたものの、やはり課題も残る。それは、選抜の評価基準をどこまで明示するか、ということである。今回は担当事務職員とのやり取りの中で、担当教員である市川の考えにしたがって選抜する自由を得たが、選抜される学生の立場に立つと、ある程度の評価基準が明示されている方が応募しやすいであろう。

3-3：プログラム準備過程

【実施過程】

上記選抜過程を経て、10 名の JATIS2013-14 参加者は、11 月 6 日から水曜日 6 限に事前研修を開始した。準備過程は、下記のようなスケジュールで行われた。

第 1 回会合（11 月 6 日）：ここでは参加学生の自己紹介のあと、各人が JATIS2013-14 で実施したいと考える企画について、ブレイン・ストーミングを行った。文化体験からフィールド・トリップ、発表・議論に至るまで多くの企画が上がったが、この会合ではそれらを各自が持ち帰り、次回会合までに検討することになった。

第 2 回会合（11 月 13 日）：ここでは各自が先週の企画案の中から、実際に実施したい企画を発表し、JATIS2013-14 で行う企画を決定した。今回の JATIS は参加学生が 10 名と限られていること、

5)　学生 J はアンケートで「英語ができる人、リーダーシップが取れる人、コミュニケーションを取ることが上手い人がいる中の一人として混ざり、私は彼らのように自分が成長したいと強く思った」と述べている。

さらには日本開催で準備しなければならないことが多岐にわたることから、表 1 のように仕事のカテゴリーを 4 段階に分け、それぞれのカテゴリーごとに庶務・プレゼン / 議論・旅行・レクという性質をあてはめた。そして、カテゴリー毎に、参加学生は少なくとも一つのチームに属し、グループとして仕事を行うこととした。

事前準備合宿（11 月 16-17 日）：ここでは参加学生が、カテゴリー1 からカテゴリー4 までのグループワークを各カテゴリー90 分かけて行った。また、JATIS2013-14 のプログラムについても、この合宿の最後に決定された。ここでの作業を通じて、各企画が具体化され、今後の作業の進展に大きく貢献した。

その後、11 月 20 日の第 3 回会合ではカテゴリー 1 の企画案、12 月 4 日の第 4 回会合ではカテゴリー 3 の企画案、一週飛ばして 12 月 18 日の第 5 回会合ではカテゴリー4 の企画案について、各グループが発表し、教職員からの指導を受けた。冬期休暇後の 2014 年 1 月 8 日にはカテゴリー2 でプレゼンする内容を各グループが発表し、教員が指導・コメントをおこなった。本学の学事暦では、秋学期は 1 月の第二週で終了し、その後、センター試験、秋学期期末試験、を経て、2 月第一週は入試、となるため、この間は各グループが独自に各企画についての作業を進行させた。しかし、JATIS 開催前にもう一度参加学生全員で会合を持ちたいという声が参加学生から上がったことから、教員参加のもと 2 月 6 日に上ケ原の大学図書館にて全員で最終的な作業を行った。

【意義と課題】

準備過程での意義として第一に指摘すべきは、学生が積極的に企画立案・運営に参加したことだ。JATIS の大きな特徴は、一つひとつの企画を学生主導で行うことである。どのような企画を行いたいか、どのような話題でトルコ人学生と議論したいか、はすべて学生主導で決定した。第二に、教職員との距離である。JATIS2013-14 を実施するにあたって、担当教職員は、教員・職員としての立場は堅持しつつも、可能な限り学生に寄り添った形での指導・助言を試みた。それが学生にどう伝わったのかは定量的に定かではない [6] が、学生が自分のアイディアを表現することが比較的容易な環境を提供することはできたのではないかと考える。第三に、事前合宿の重要性である。これまでの慣例として中村が提案し、市川が採用して実施したが、グループワークを本格化させるにあたり、参加学生間のつながりを深めたり、教職員が学生個々の個性を理解したりすることに大きく貢献した。

しかし、課題も残された。第一は、学生の ITC 利用に関する能力のバラつきである。今回に限って言えば、神戸三田キャンパス（KSC）の学生に比して、上ケ原・聖和キャンパスの学生の ITC 利用能力の低さが目立った。結果として議事録を教員が取らなくてはならなくなったり、そもそも合宿や会合に PC を持参しないので、インターネットを用いた情報収集などに学生が手間取っていた

表 1 ：JATIS 2013-14 役割分担表

	Team 1	Team 2	Team 3	Team 4	Team 5
カテゴリー1 【庶務】	しおり / 報告書 A・B・I・K	キャンパス・ツアー D・E	セレモニー C・G・J	記録 D・H	
カテゴリー2 【議論】	トルコと日本の関係 E・I・B	文化 G・H・J	教育 A・K	平和 C・D	
カテゴリー3 【旅行】	京都 FT B・E・G・I・H	広島 FT A・C・D・J・K			
カテゴリー4 【レク】	たこ焼きパーティ H・J	世界遺産紹介 D・I	文化体験 C・E	料理 A・K	夜のレク B・G

6) アンケートでは「市川先生、中村さんが積極的に学生の中に入ってサポートしてくださった（J)」「日本人学生の参加者がそれぞれ特徴を持ち、行動していた（E)」との評価があった。

りしていたのは印象的であった。

第二に、本学の Web システムの問題である。本学では教員に自由に使えるホームページ領域が存在しない[7]ため、トルコ側との情報共有については Facebook を利用した[8]。SNS（Social Networking Service）の利用で、参加学生間のやり取りがコメント欄やメッセージによって可能となり、準備の進行に大きく役立った。しかし、可能ならば、大学間国際交流プログラムに関連する情報共有用のネット空間などの整備が行われることが望ましい。

第三に、準備期間の短さである。本学のように 2 月第一週はすべて入試となり教室が閉まる状況においては、センター試験・定期試験・入試と約 4 週のあいだのグループワークの活動に支障が出る。とくに JATIS 日本開催の場合には日本人学生の準備がかなり必要となるため、入試期間に第 2 回の準備合宿を行うなどの必要があろう[9]。

第四に、経験の共有である。前述のとおり、今回参加した本学学生のうち過去に JATIS に参加したのは D のみであり、それもトルコ開催での参加であった。したがって、参加学生は実質的にゼロからのスタートであったと言って良い。この点についても、例えば参加者選抜後に、過去の JATIS 参加者との交流会を設定することで、過去に蓄積された知見・経験を次の世代に引き継ぐことができると考える[10]。

3-4：外部の企画と JATIS とのリンケージ

【実施過程】

JATIS2013-14 の準備を進めるにあたり、特にカテゴリー2 の発表と議論について、本学参加学生の中には戸惑いを見せる者もいた。その理由は、大別すると 2 つある。第一は、トルコそのものについての知識に関する不安であり、第二には英語での発表と議論という機会にこれまであまり恵まれてこなかったこと、である。

第一の点については、JATIS2013-14 の担当教員である市川はトルコ研究・イスラーム研究は専門外であるため、外部専門家の知見を仰いだ。2014 年 1 月 21 日、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで長年にわたりイスラーム圏との学術・学生交流に尽力され、近年はトルコとの深い関係を構築されている奥田敦氏（慶應義塾大学総合政策学部教授）をお招きし、関西学院大学上ケ原キャンパス大学図書館ホールにてご講演いただいた。ここで、「アッラーという神－イスラームの基礎を知る」および「イスラーム圏との学術交流について」の二つの演題で 3 時間お話いただき、その前後で本学参加学生が奥田教授に多くの質問をすることで、第一の課題を補った。

第二の点については、本学がコンソーシアム校として参加している EUIJ 関西が 2013 年 12 月 26-28 日に開催した英語プレゼン・ディベート合宿への参加を推奨した。市川が本学産業研究所において EUIJ 関西業務に従事している関係で、JATIS2013-14 参加学生のうち、B・E・G・I の 4 名を英語・プレゼン合宿に参加させることができた。彼らはそこで英語での発表・議論の基礎を学び、JATIS 本番でも見事にそれをこなした。

【意義と課題】

本学では実践型“世界市民”育成プログラムを通じて、本学学生の「世界市民」化への多彩な支援体制を用意している。そこには、①将来の国際社会でリーダーとなる人材を育成する「グローバルリーダーコース」、②世界で専門的知識・技能を発揮できる人材を育成する「グローバルエキスパートコース」、③国際社会で他者と協調して社会貢献できる人材を育成する「グローバルシティズンコース」があり、それぞれライフデザイン科

7）今回は、担当教員が学外でもつホームページ領域を利用して、JATIS2013-14 のプログラムを掲示しトルコ側に伝えたが、このような対応は公式の大学間交流のあるべき姿とは言い難い。http://web.sfc.keio.ac.jp/~akirai/Lectures/2013KG-JATIS-in-Japan.html

8）https://www.facebook.com/JATIS2014

9）学生アンケートでは「準備期間が十分でない。(D)」「プログラムの中で準備不足でギリギリになって慌てることがよくあった（C)」「もう少し時間が欲しいと思いました（I)」旨の指摘があった。

10）学生アンケートでは「前回・前々回の反省を後に生かせない（K)」「ここで得た経験を次に繋げられるか、ということに疑問が残る（J)」旨の指摘があった。

目（ベーシック科目）、グローバルスタディーズ科目（コア科目）、言語教育科目（コア科目）、実践科目（コア科目）リーダー養成科目（グローバルリーダーコース必修）が用意されている。

JATIS は実践科目（コア科目）のひとつに位置する。他の実践型“世界市民”育成プログラム科目との連携や、JATIS 担当教員が JATIS で必要となる技能の育成・知識の獲得のために、実践型“世界市民”育成プログラムの別の科目を担当するなどを行うことで、JATIS を契機とした本学学生の「世界市民」化に貢献することが可能になるかもしれない。

3-5：セミナー開催期間

【実施過程】

JATIS2013-14 は 2014 年 2 月 11 日から 21 日までの間、関西学院大学西宮上ケ原キャンパスを拠点に開催された。日本側は市川・中村と参加学生 10 名（男子 2 名・女子 8 名）、トルコ側（コジャエリ大学）からはハスレット・チョマック副学長、セルダル・パムク国際関係・EU センター長と、参加学生 10 名（男子 6 名・女子 4 名）が参加した。

実際の学生が企画・運営した JATIS2013-14 のプログラムは表 2 の通りである。

本稿では紙幅の関係で JATIS2013-14 の実際のプログラムの内容については深く踏み込まないが、これについてはすでに本学国際教育・協力センターから学生の手による編集で報告書を刊行している[11]ので、そちらを参照願いたい。

【意義と課題】

11 日間のプログラムでの最大の意義は、本学参加学生とトルコ側参加学生が非常に強い友情を育んだことであろう。市川・中村は SC にて日本人学生 10 名・トルコ人学生 10 名と共同生活を行ったが、一人としてルールを逸脱したり、はめをはずしたりする学生がいなかったのは、参加学生に

表 2：JATIS 2013-14 プログラム

2/11（火） 21:00　トルコ側 SC 着 21:10　SC 利用法についてのガイダンス	2/17（月） 9:00-　日本文化体験（書道） 13:00-　トルコ文化体験（結婚式の様子） 15:00-　プレゼン＆議論『日本とトルコの関係』
2/12（水） 9:00-　キャンパス・ツアー／宝探しゲーム 13:30-　プレゼン＆議論『教育』 18:00-　ウェルカム・セレモニー	2/18（火） 広島フィールド・トリップ 厳島神社・宮島散策を含む 広島にて一泊
2/13（木） 10:00-　世界遺産／フィールド・トリップ紹介 12:30-　スーパーマーケットめぐり 15:00-　トルコと日本の料理体験	2/19（水） 広島フィールド・トリップ（続き） 原爆ドーム・広島平和記念資料館・筆の里工房（熊野筆）訪問を含む
2/14（金） 京都フィールド・トリップ 伏見稲荷大社・清水寺・日本食レストラン体験を含む	2/20（木） 9:00-　プレゼン＆議論『平和』 17:00-　インフォーマル・フェアウェル・セレモニー
2/15（土） 9:00-　プレゼン＆議論『文化』 12:40-　たこ焼きパーティ 16:00-　トルコ側の時間（トルコの歌と踊りの紹介） 22:00-　レクリエーション@ SC	2/21（金） 11:00-　フォーマル・フェアウェル・セレモニー 13:00-　ショッピング@西宮ガーデンズ 18:40　西宮北口関空行きリムジンバス・ターミナルにて見送り
2/16（日） 12:00-　大阪心斎橋のトルコ料理屋 Istanbul KONAK にて、大阪大学大学院言語文化研究科アブドゥルラッハマン・ギュルベヤズ准教授による招待ランチ 14:00-　オプショナル・ツアー	

注：SC は関西学院大学スポーツセンターを指す。

11）関西学院大学国際教育・協力センター（2014）のこと。

恵まれたといえる。第二の意義は、プログラムを企画・運営する側の日本人学生たちのあいだに、責任感が芽生えたこと[12]である。はじめは自分の担当する企画以外への関心が薄かった学生も、徐々に全体のマネジメントに貢献しようとする気持ちが芽生えた。2 月 15 日からは D が呼びかけ人となって、日本人学生が夜 10 時から自発的に毎日ミーティングを開催するようになり、プログラム全体を全員で把握し、牽引していこう、という気持ちが伝わってきた[13]。第三の意義は、このような学生が醸成した良好な雰囲気も手助けして、本学教職員とトルコ側副学長・センター長との関係も良好に構築されたことである。今回はトルコ側から副学長と国際関係センター長という要職につく 2 名の教員が引率で来日されたが、これに対して、2 月 12 日および 21 日のセレモニーでの本学国際連携機構長（副学長）・CIEC センター長・副長・国際連携機構事務部長・次長の参加、2 月 16 日の本学副学長と市川によるディナーの設定、2 月 17 日の本学学長との面会、を設定し、大学間の信頼関係の強化を図った。こうした努力により、2 月 18-20 日には非公式に来年度 JATIS の実施が決定し、規模も各 20 名実施と拡大する方向で、話がまとまった。



図 1：チョマック副学長とパムク教授の本学井上学長訪問の様子（2014 年 2 月 17 日）

このように意義の大きかった JATIS2013-14 であるが、課題も見受けられた。

第一は、本学でイスラーム教の教職員・学生を受け入れる場合におけるいわゆるイスラーム対応、という面において必ずしも十分ではない点である。長年イスラーム圏との学術・学生交流に従事してきた奥田は、「礼拝時間の確保、食事における豚脂・豚肉、アルコールのチェック、さらには日本人女子学生の服装において過度の露出を控える配慮など徹底して行った。宿泊場所である SFC のゲストハウスの各部屋に礼拝の方向（キブラ）を示すシールも第 1 回目から貼り続けている」[14]と記述している。本学の JATIS において、どこまでのイスラーム対応を行うかは、議論の余地があろうが、少なくとも食事については、次回日本開催までに具体的方針を策定したい[15]。

第二は、学生の交流、といった場合、それはどこまでのことを指すのか、という問題である。言い換えれば、「どうであれば」大学間国際交流プログラムが成功したと言えるのであろうか、という問いである。もちろん JATIS2013-14 において日本とトルコの学生は友情を深め、相手の国に対する知識・認識を深めたことは確かであるし、共

12）アンケート回答では、これに関して「皆と協力し、まとめていくプロセスの大変さを知ることができた。そして、その改善策を皆で話し合い、実行できた（B)」「社会・組織において大切なことを学ぶことができた（C)」「企画側としての大人のマナーを知ることができた（I)」など、困難を乗り越えた満足が学生に一定程度存在していることが伺える。

13）アンケートでは「スケジュールの把握を日本人学生がしていなかった（A）(B)」「もう少し自分が率先して動くということができればよい良かったと思う（G)」が指摘され、この問題を学生が自発的に克服しようとした点が評価できよう。

14）奥田 (2011), p.60。

15）国際交流において食事が課題の一つになることがある。特にイスラーム圏の人々に対して、食材には配慮が必要となる。本学にはイスラーム圏出身の留学生が多数在籍するが学内施設においてハラール・メニューの提供は行っていない。また食物アレルギー・日本食への適応度合い等も多様であり、食事会場、メニュー、価格等の選定は簡単ではない。本学上ケ原キャンパスおよびその周辺には大きく分けて 4 つの施設がある。①学生向けの生協食堂、②カフェ、ファストフード店・定食屋、③コンビニエンスストア、④主に来客応対時や教職員・近隣住民が利用するレストラン、である。JATIS13-14 は本学を主な会場として実施しているため、学内施設の利用が最も効率的であり、JATIS 実施期間中を含む学生の休暇期間中は営業を行っていない②を除く①③④の施設を中心にアレンジを行った。JATIS13-14 ではコジャエリ大学副学長が参加したこともあり、学生と同じ食事を毎回提供することが難しい場面が度 ↗

通の話題について異なる視点からの議論が白熱したのもまた確かである。しかし、前出の奥田の言う「「大きなわれわれ」、つまり「違いではなく、むしろ共通点を探らなければならない。（中略）「彼らと我々が何者であることによって共通のビジョンが描けるのか」」[16] という関係にまで深化が見られたかどうかについては、議論の余地がある。参加学生が、本学の世界を見渡せる国際性と人間性を備えた「世界市民」となるためには、学生・教職員が常に目標を見失わずに自己研鑽し続けることが求められよう。

第三に、そして最も強調しておきたいことであるが、この種の大学間国際交流プログラムを「継続的」に実施し、「安定軌道」に持っていくためには、その初期段階において、キーパーソン間の信頼関係が最も重要であることだ。JATIS については中村がその立ち上げから今日の形態でのプログラム開催へと定着させることに大きく貢献してきた。今回の JATIS2013-14 では市川が初めて JATIS の担当教員としてコジャエリ大学の副学長・国際センター長との信頼関係の構築に努めた。結果として、2 月 20 日に市川・中村と先方副学長・国際センター長との夕食会の席で、今後の JATIS の発展的継続と、来年度のトルコ開催の JATIS については参加学生の規模を各 20 名に拡大することで合意し、チョマック副学長はその場でトルコ・コジャエリ大学の国際関係副学長に電話でその旨を伝え、翌日には同副学長の署名付きで次年度 JATIS 受入決定の旨の公式文書が E-mail で本学に届けられた。JATIS は 4 年の歴史をもつプログラムであるが、その開催にあたっては未だ不安定な部分も見受けられる。本学と先方とのキーパーソンを今後複数年据え置き、JATIS を「安定軌道」に乗せるための施策が強く求められる。

3-6：セミナー後の状況

【実施過程】

セミナー開催後、本学における事務的な最大の残務は報告書 [17] の作成であった。この業務は骨の折れる作業であったが、担当学生の努力により締切日である 3 月 10 日までには入稿され、年度内に刊行された。

コジャエリ大学のチョマック副学長とパムック教授からはお礼の E-mail を複数回に渡り頂戴した。また、本学学長、国際連携機構長（副学長）、CIEC センター長・副長、国際連携機構事務部長、市川、中村にはコジャエリ大学学長の名で感謝状が送られた。また、コジャエリ大学からはトルコ版のエラスムス・プログラムとも言える“Mevlana Exchange Programme”についての打診があり、現在、本学 CIEC の交換留学・大学間協定担当部局とのあいだで交渉が進んでいるという。

【意義と課題】

コジャエリ大学は JATIS2013-14 を契機として、JATIS のみならず交換留学の拡充、大学院生交流・研究者間交流に関心を持ち、発展的に本学との関係を構築しく意思を表明している。JATIS2013-14 を担当した教職員にとって、これに勝る喜びはない。

今後、課題は本学の対応となってこよう。「組織対組織」として安定的に JATIS が継続できるようになるまでは、「人対人」でキーパーソン間の信頼関係に立脚しつつ、プログラムの継続・発展に取り組むことが望ましい。

4：トルコ交流セミナーと学生の国際化

本節では参加学生の視点から、JATIS および本学の国際プログラムの評価と課題を考えるため、定量的分析を試みる。分析するデータはプログラム前後に実施した学生アンケートである。

↘

々あった。しかし、弁当発注等や学内関係者との食事会のセッティング等の工夫、トルコ側教員の理解もあって乗り切ることができた。今後ハラール・メニューの提供も含め、食事施設やメニュー等の改善が課題である。

16）奥田（2011），p.67。

17）関西学院大学国際教育・協力センター（2014）のこと。

4-1：学生の国際化の自己認識：その影響要因と学生生活の関係を中心に

本項では、学生の「国際化の自己認識」を検討していきたい[18]。当初、JATIS 参加学生の「国際化の自己認識」は 5 段階で平均 3.2 であった（表 4 参照）。この回答と語学試験の受験回数（r=.650, p=.042）、海外旅行経験の有無（r=.789, p=.007）[19]とその回数（r=.551, p=.099）や留学経験の有無とその長さ（ともに r=.604, p=.065）には関係が認められた。つまり、「国際化の自己認識」が、海外旅行の回数と客観的な語学試験への受験回数という「ものさし」に規定される可能性がうかがえる。試験の点数とは無関係（r=.400, p=.286）であるが、受験回数が留学経験・その期間（r=.712, p=.021）に左右されているから、外国人と意思疎通をとる機会や留学につながる経験が、学生の意識に影響を与えていると考えられる。試験の点数が外国人の友人の数（r=.828, p=.006）とその割合（r＝.746, p＝.021）、海外旅行の回数（r＝.722, p=.028）と関係することに加え、最初のパスポート取得時期（r= － .901, p=.014）に関係している点も注目に値する[20]。なぜなら、パスポートの取得年齢が低いほど語学点数は高くなりやすいという傾向は、語学試験点数が幼い時から海外旅行を（提供）できる環境に影響される可能性を暗示するからである。海外旅行の回数と生活期間には有意な相関関係がないことから、単なる期間の長さよりも、外部要因として短期でも外国人と接触できる環境が学生の「国際化の自己認識」には重要だといえよう。

このアンケートでは、表 3 にあるように日本の国際化（抜粋、「よく当てはまる」＝ 1 から「当てはまらない」＝ 5 で評価、数値が小さいほど国際化していると評価となる）について回答を求めた。各回答と既出の関係の変数との関係では「日本の経済は国際化に対応している」と「海外旅行の回数」（r= － .643, p=.045）[21]には（逆）相関が表れた。しかし、国（全体）の国際化、政治・政府（行政）、（表 3 にはない）外国教育への満足度、将来の多民族化、国際化にともなう犯罪率の増加、国際化と日本人のアイデンティティー喪失と「国際化の自己認識」には有意なつながりは表れなかった。この点は大学生が国の国際化を意識できる場面、機会、国際化に伴う懸念を日常生活で感じにくい可能性を物語る。

そして「本学の国際化」に回答者は国や政治・行政部門と同等以上の評価を与えた。回答のばらつき度を示す標準偏差の数値が比較的小さく、日本よりも本学が国際化されていると学生は評価しているようだ。ただし、語学試験回数とその点数、外国人の友人数と割合、国際化の自己認識、海外旅行の回数との間に有意な傾向はなかった。

学生の国際化を促進しそうな海外との接触方法のなかで有力な選択肢として、（短～長期）留学への参加がある。参加前のアンケートの「あなたが海外留学に行く場合、その点を意識しますか」という大問において、本学の研修プログラムの満足度（「不満」：1～「満足している」：5）と実施

表 3：国際化の自己認識と日本の国際化評価に関する記述統計量（抜粋）

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
国際化の自己認識	10	1	5	3.2	1.135
日本の国際化は十分	10	1	5	3.4	1.265
日本の政治は国際化に積極的	10	1	5	2.9	1.197
日本の経済は国際化に対応	10	2	5	3.3	1.059
日本政府は国際化を国内にアピール出来ている	10	3	5	4.0	.816
関学生の国際化	10	2	4	2.9	.876

18）回答者数の少なさから本稿は高度な分析はできないため、相関分析の結果に即して検討する。

19）「あなたは自分自身が国際的だと思いますか」に対して「強く思わない」～「強く思う」を 5 段階評価した。主要な英語能力試験に関する点数互換表を参考に、計 6 段階で評価した。

20）ここでの回答数は 6 名であった。

21）「日本の経済は国際化に対応できている」では 5 段階評価とした。

時期（「よく当てはまる」：1～「当てはまらない」：5）の相関は－ .771（p=.009）であった。これは、大学の国際化の取組に満足する学生が内容次第で学期中でも（国連や外資系・多国籍企業などの）魅力的な研修に積極的に参加する可能性を示す。

しかし、学生の回答には下記のような特徴も垣間見られる。学生の回答を参照した時、プログラム内容として訪問・滞在国の選定では同世代との交流（r=.767, p=.010）、幅広い世代との交流（r=.672、p=.033）には積極的であるが、ボランティアなどの社会交流への積極性には関係性がみられない。つまり、国内外の実社会と学生自身の関わりを高める体験の必要はあるけれども、まずは「友達感覚」を築きやすい同世代との交流から世界とのつながりや視野を広げたいと思う一方で、積極的な社会的関与には慎重であるという学生の気持ちが指摘される。対照的に、実践的な内容を志向した時には専門的内容でも挑戦する者もいるようである（r=.701, p=.024）。加えて、語学研修後の「成果報告主義（感想文レベルを超えた調査報告書作成）」が有意であるから（r=.653, p=.041）、レベルに応じた到達度や研修成果が求められる可能性も学生は是と考えるようだ。

4-2：プログラム前後の自己評価の変化とプログラムの評価

JATIS の前後で国際化の意識は、どのように変化したのだろうか。このことは JATIS の評価にも関連する。学生の回答（表 4）を参照すると、JATIS の前後で平均値の上昇、編準偏差の低下という現象がみられる。後の数値は回答のまとまりの度合の変化を教えるが、前後の平均値の統計的な有意差までは述べていない。そのため Wilcoxon の符号付き順位検定を加えた時、学生の「国際化の自己認識」の差を示す（負の順位に基づいた時の Z 値＝ -2.414、p ＝ .016）といえるため、全体的にプログラムへの参加が学生の国際化の自己認識の向上に貢献した可能性がある[22)]。

全体的な評価に対して、個別プログラム内容に関する満足度の平均値（表 5）では、In/formal Farwell Ceremony が高く、夜のリクエーションが低めであった。料理体験と夜のリクエーションの

表 4：学生の国際化の自己認識に関する記述統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
（前）国際化の自己認識	10	1	5	3.2	1.135
（後）国際化の自己認識	10	4	5	4.4	.516

表 5：各プログラムの満足度に関する記述統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Welcome ceremony	10	4	5	4.5	.52705
P&D- 教育	10	2	5	3.3	.94868
P&D- 文化	10	2	5	4.3	.94868
P&D- 日本とトルコ	10	2	5	4.5	.97183
P&D- 平和	10	4	5	4.9	.31623
世界遺産紹介	10	4	5	4.7	.48305
料理体験	10	2	5	4.2	1.22927
京都旅行	10	3	5	4.1	.73786
たこ焼き	10	4	5	4.8	.42164
夜のリクエーション	10	1	5	3.0	1.05409
日本文化体験	10	4	5	4.7	.48305
トルコ文化体験	10	3	5	4.4	.69921
Informal Farwell Ceremony	9	5	5	5.0	.00000
Formal Farwell Ceremony	9	5	5	5.0	.00000

※ P&D: presentation & discussion

22）調査サンプルが少ないため統計的正規性を前提としない手法として本文の手法を用いた。

標準偏差から、それらの満足度には幅があったことがわかる。

その他「日本とトルコ」×「教育」（r=.663, p=0.037）、同×「平和」（r=.904, p=0.000）、「平和」と「たこ焼き」、「夜のリクエーション」（各 r=.663, p=0.037）、「たこ焼き」と「夜のリクエーション」（r=.750, p=0.012）に強い相関があった。この関係は、日本とトルコの政治経済環境や文化の相違を明確に確認、体験できる企画が満足度を上げる「必須要素」であり、満足度の評価指標の一つとして考慮するべきと判断できる。

4-3：学生による運営に関する評価・反省と課題

次に、セミナー運営の満足度の回答結果（表 6）を見てみよう。学生は概ね運営面で JATIS に満足していたことが読み取れる。ただし、「アウトプットの充実度」と「トルコという国への理解」では「あまり満足していない：2」を記した学生もいた。この点は、当該のプログラムの評価と改良などに関する今後の検討課題の一つかもしれない。

次に、プログラム内容の改善点について触れる。学生の自由記述の分析の手順は単語レベルに分解され（形態素解析）、一文の中にある 2 つ（以上）の名詞の同時登場回数（2 回以上の共起分析）が整理された。そして、共起関係にある単語同士を結びつけ、ネットワーク状に表示した結果が図 2 である。

同図で共起回数が多いセットは「日本－体験（5 回）」、「日本－トルコ」、「トルコ－料理」、「自分－考え」、「司会－体験」（以上 4 回）であった。図中のトピックから発表と議論、ゲーム、料理、スケジュール変更、表現力について、評価および改善点・反省が記された。実際の回答用紙でも料理の準備、リーダーシップ不足、京都旅行の日程・内容変更に関する反省もみられた。

表 6：プログラム運営の満足度・評価に関する記述統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
期待と全体的な満足度	10	4	5	4.7	.483
教員・事務職員の対応	10	5	5	5.0	.000
学生の自主性の尊重	10	4	5	4.6	.516
要求課題の適正さ	10	4	5	4.4	.516
教員の（準備）対応	10	4	5	4.9	.316
受講者菅の関係構築	10	4	5	4.6	.516
新しい知識・技能獲得	10	4	5	4.6	.516
物事や視点のひろがり	10	3	5	4.5	.707
アウトプットの充実度	10	2	5	3.9	.994
今後の友人・知人関係拡大可能性	10	3	5	4.7	.675
進路への参考	10	4	5	4.3	.483
自分の国際化への貢献	10	3	5	4.1	.738
大学の国際化への貢献	10	3	5	4.2	.632
日本・トルコ二か国間の草の根交流への貢献	10	4	5	4.6	.516
トルコという国への理解	10	2	5	4.3	.949

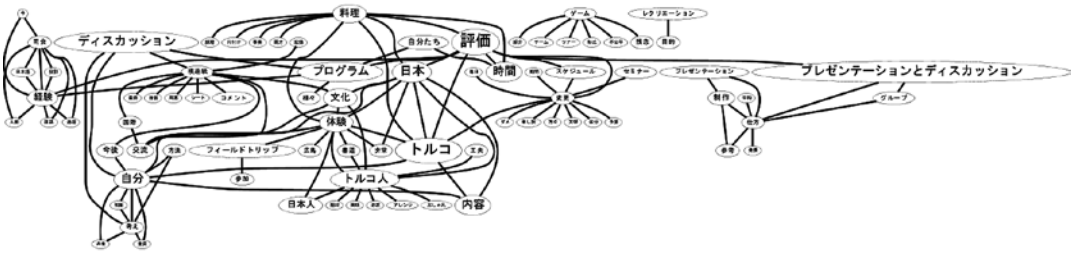


図 2：プログラム・イベントで評価できた / できない点に関する自由記述状況

注：図は 2 回以上の共起する語同士で構成されるが、文字の大きさが中心性を表さない点に注意。

５：結語

以上、定性・定量の両側面から JATIS2013-14 における大学間国際交流の意義と課題を検討してきた。とくに、定量の側面からは、短期でも外国人と接触できる環境が学生の「国際化の自己認識」に重要であることが示され、JATIS2013-14 の前後で本学参加学生の「国際化の自己認識」が向上したことが認められた。このことは、JATIS が本学学生の国際化にとっての第一歩として機能していることを物語っており、その存在意義が十分に認められるデータとなっている。他方、定量分析では、「友達感覚」を築きやすい同世代との交流を通じて、世界とのつながりや視野の拡大を求める一方で、積極的な社会的関与に慎重である傾向が示された。JATIS のような Open Eyes プログラムから、交換留学や国連ユースボランティアといった次の段階の国際プログラムへの橋渡しが課題として浮き彫りにされた。

これらを踏まえて、来年度の JATIS の運営にあたっては、以下の点に留意していきたい。キーワードは「連携」である。第一に、JATIS と他の国際プログラムの連携である。JATIS を踏み台として次の国際プログラムへの橋渡しを十分に意識した運営が求められる。第二に、本学担当教職員の連携である。国際プログラムならではのアクシデントを乗り越えるためには、日頃からの情報の共有や意思統一が求められる。第三にトルコ側との連携である。両サイドのキーパーソンを基礎とした、まずは属人的であったとしても、十分な信頼関係を基礎とした連携が必要だ。第四に JATIS の OB/OG との連携である。JATIS 参加学生が十分なパフォーマンスを発揮できるよう、情報・経験の共有の機会が欲しい。第五に、他の授業や機会との連携である。トルコ・イスラーム関係の講演会、プレゼン・ディベート合宿への参加推奨、ICT 利用の向上、など JATIS の運営において必要とされる知識や技能をいかに学生に習得させるかが鍵となる。そして最後に、日本学生とトルコ学生との交流の質的改善である。異文化理解のみならず、「社会を共創する関係」を築き上げることができるようなセミナーへと昇華させていきたい。

参考文献

奥田敦（2011）、「大学高等教育における学術交流活動の意義―アラブ人学生歓迎プログラム（ASP）10 年 の 軌 跡 ―」、KEIO SFC JOURNAL, Vol.11, No.2, pp.57-72。

関西学院大学国際教育・協力センター（2014）編、『トルコ交流セミナー2014』、関西学院大学国際教育・協力センター。

参考 Website

EUIJ 関西　http://euij-kansai.jp/

JATIS2013-14　Facebook ページ
https://www.facebook.com/JATIS2014

慶應義塾大学 SFC 奥田敦研究室
http://nafidha.sfc.keio.ac.jp/

トルコ・コジャエリ大学：http://www.kocaeli.edu.tr/int/

関西学院大学国際教育・協力センター：
http://www.kwansei.ac.jp/c_ciec/index.html

関西学院大学実践型“世界市民”育成プログラム：
http://kgglobal.kwansei.ac.jp/index.html